

ユーゲント・フィルハーモニカー
第5回定期演奏会



The 5th Regular Concert

Wolfgang Amadeus Mozart

モーツァルト / 交響曲第35番 二長調 K.385 《ハフナー》

- I Allegro con spirito
- II Andante
- III Menuetto
- IV Presto

Richard Georg Strauss

R. シュトラウス / オーボエ協奏曲 二長調 AV.144

- I Allegro moderato
- II Andante
- III Vivace

— 休憩 —

Johannes Brahms

ブラームス / 交響曲第2番 二長調 Op.73

指揮 河地 良智
オーボエ独奏 鷹栖 美恵子

- I Allegro non troppo
- II Adagio non troppo
- III Allegretto grazioso (quasi andantino)
- IV Allegro con spirito

※ 開演中は携帯電話の電源をお切り下さい。

※ 他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮下さい。

● ご挨拶 Greeting ●

本日はユーゲント・フィルハーモニカー第5回定期演奏会にお越し頂きまして誠にありがとうございます。
います。

突然ですが、「色聴(しきちょう)」という感覚をご存知でしょうか。音に「色」を見ることが出来る感覚を指す言葉です。今回、私たちが演奏いたします曲は、すべて「二長調」という共通点をもっています。色聴ではこの「二長調」を「黄色」に変換することが多いことから、今回の演奏会チラシにもその黄色を一面に飾っています。白と黒で書かれた音符たちが色とりどりの音となってホール一杯に響き渡るとは、なんとロマンチックなことでしょう。今回の演奏会では、そんな「黄色」のように鮮やかに明るく、そして華やかな音楽の世界に、皆様をお連れいたします。

最後になりましたが、ユーゲント・フィルハーモニカーの運営・活動にあたってお力添えを頂いたすべての皆様に、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

● 指揮者紹介 Conductor ●

Yoshinori Kawachi

河地 良智

桐朋学園大学指揮科に学び、斉藤秀雄氏、秋山和慶氏に師事。1973年、第3回民音指揮コンクール(現東京国際指揮コンクール)で奨励賞受賞。二期会オペラやN響定期公演などで、W. サヴァリッシュ氏、O. スウィトナー氏等の副指揮者を務め、1975年、群響正指揮者に就任。1983年より文化庁派遣員としてドイツ・バイエルン国立歌劇場でW. サヴァリッシュ氏、ミラノ・スカラ座でG. パタネ氏等について積極的に歌劇場での研鑽を積む。帰国後、日・米・伊共同国際ワークショップにおいて「蝶々夫人」のプレジャ版を初演、二期会渡欧旅行公演同行の際には、ベオグラード・フィル、ハンガリー国立歌劇場管弦楽団を指揮する。



1997年から、全日本高等学校選抜オーケストラのオーストリア公演を指揮。1998年に日本ユング・オーケストラを結成し、ドイツ公演を指揮するなど近年は音楽の国際交流にも力を入れている。それらの貢献により、北京市中日交流センター、オーストリア・ブルゲンランド州、諫早市より文化特別賞等を受ける。ユーゲント・フィルとは第1回定期演奏会においてブラームスの交響曲第1番を指揮、今回で二度目の共演となる。現在、洗足学園音楽大学学部長、同大学院音楽研究科長、東京藝術大学講師、二期会オペラスタジオ講師として後進の指導にもあたっている。

● ソリスト紹介 Solist ●

Mieko Takasu

鷹栖 美恵子

12歳よりオーボエを始める。

2005年、第15回日本クラシック音楽コンクール高校生木管部門全国大会最高位受賞。2006年、大宮光陵高校音楽科卒業後、東京音楽大学に給費入学奨学生として入学。2008年、第25回日本管打楽器コンクールオーボエ部門第1位。日本フィルハーモニー交響楽団と共演。2009年、東京音楽大学シンフォニーオーケストラ定期演奏会のソリストとして、広島、名古屋、東京にて演奏。2008-2010年、小澤征爾音楽塾、サイトウキネンフェスティバル松本、出演。2010年、同大学卒業、ヤマハ新人演奏会出演。現在、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、一番奏者。これまでにオーボエを池田肇、井上恵子、宮本文昭各氏に師事。当団、第1回・第2回定期演奏会ではオーボエ団員として活躍した。



Wolfgang Amadeus Mozart

モーツァルト / 交響曲第35番 二長調 K.385 《ハフナー》

モーツァルトが自由を求めてウィーンの地を踏んだのは1781年、25歳の時であった。彼はウィーンに移るとウェーバー家へ身を寄せ、この家の三女であるコンスタンツェを強く慕うようになる。彼の父親の猛烈な反対を押し切り、モーツァルトは翌年シュテファン教会で式を挙げる。幸せの絶頂の中で彼の創作意欲は燃えさかり、次々と傑作を生み出した。ハフナーもこの時期に書かれた作品である。

「ハフナー」と呼ばれるのは、ザルツブルクの富豪ジークムント・ハフナーの爵位授与式のための祝祭音楽として書かれた6楽章からなるセレナードをシンフォニーに作り変えたことに由来する。この改作に際しモーツァルトは楽章を二つ削ったものの、大きな変更は加えていない。これは、いかに原曲のセレナードが音楽的に充実していたかを物語る。実際、モーツァルトがセレナードの楽譜を見直したとき、その音楽の充実に関心したと驚いたそう。

古典派の作曲家の中でモーツァルトの特徴とはなんだろうか？ 私は「若さ」と「スピード感」だと思う。どの曲にも常に生き生きとしたエネルギーが脈打っている。とりわけ新婚時期にかかれた「ハフナー」は抜群にフレッシュな曲に違いない。

さて、つい5か月前までは団員ではなかった私だが、ここでユーゲント・フィルハーモニカーの紹介をしたい。楽団名はドイツ語で「青年のオーケストラ」を意味するが、その名の通り、「年齢」か「気持ち」のどちらかは若い奏者が構成されており、とにかく全てがエネルギッシュである。そして個性的な奏者が揃っている。ユーゲント・フィルハーモニカーの音楽の魅力は全員が何かを発信しているところにあると思う。溶け合い、せめぎ合いながら良いものを創ることができる。これに尽きると思う。活動も定期演奏会にとどまらず、福祉施設への訪問演奏からレジャーまで幅があり、人生に貪欲な人間の集団だ。この集団のなかで揉まれ、今では私もすっかり「ユーゲンツ」になってしまった。

今回はユーゲント・フィルハーモニカー史上初のモーツァルトを演奏する。きっと、フレッシュな演奏になることは間違いないだろう。是非、お楽しみ頂きたい。

(笠原 進太朗)

Richard Georg Strauss

R.シュトラウス / オーボエ協奏曲 二長調 AV.144

第二次世界大戦が終結した1945年。敗戦したドイツは連合軍によって占領され、当時シュトラウスが住んでいたミュンヘン近郊にもアメリカ軍が進駐していた。80歳を越えたシュトラウスは既に作曲家として世界的に有名であり、彼のもとを訪れるアメリカ人は少なくなかった。そんなある日、シュトラウスの住む山荘を訪れたアメリカの若い兵士がこんな問いかけをした。

—— あなたの作品にはオーボエの素晴らしいソロが多くありますね。
そのオーボエのための協奏曲を書くお考えはないのですか？

この兵士は、戦前にピッツバーグ交響楽団のオーボエ奏者だったジョン・デ・ランシーだった。シュトラウスは「…ないね」とそっけない返事を返した。しかし、同年の秋、シュトラウスはスイスへと移住してまもなく気変わりし、一気にオーボエ協奏曲を書き上げた。

時を越えて、一つ目の「言葉のない約束」が果たされた。

シュトラウスはこの協奏曲の初演に際して独奏オーボエにランシーを希望していたが、ラ

ンシーは帰国しなければならなかったため実現しなかった。3年後にシュトラウスは息を引き取り、ランシーの演奏を聴くことはとうとうできなかった。ランシーは後にフィラデルフィア管の首席奏者をつとめ、初演から41年後にこの協奏曲を演奏した。

時を越えて、二つ目の「言葉のない約束」が果たされた。

今回、独奏オーボエに迎えた鷹栖美恵子氏はかつて、ユーゲントフィル創設時に当団のオーボエ奏者として活動していた。当時コンサートマスターを務めていた僕は、彼女の音色に触れて「いつか彼女をソリストに迎えてユーゲントで協奏曲をやろう」と心に決めた。この協奏曲はそんな「約束」によって紡がれる運命にある作品なのだと思う。

あれから5年、僕たちの「言葉のない約束」が果たされようとしている。

(安斎拓志)

Johannes Brahms

ブラームス / 交響曲第2番 二長調 Op.73

—— 新作の交響曲はとてもメランコリックなもので、あなたは耐えられないほどだ。
(中略) スコアは死亡通知の黒枠を付けて出版しなければならない。

—— あなたはこれまでこの作品以上の世界苦にさいなまれたものを聴いたことがない。全楽章へ短調だ。

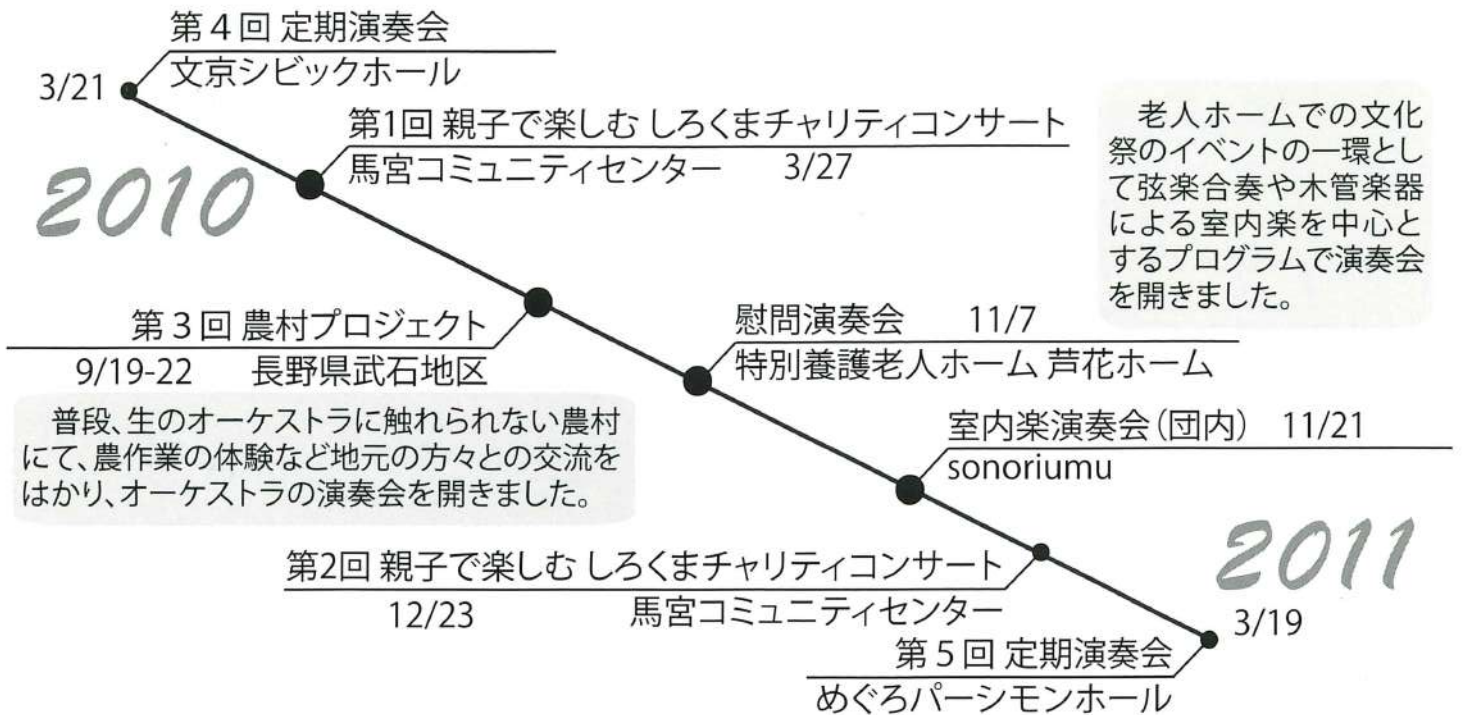
これは、ブラームスが知人に宛てた手紙の抜粋である。ここで話題になっている「新作の交響曲」「この作品」が、実は彼の交響曲第2番のことだと知ったなら、きっと誰もがびっくりするだろう。実際に演奏を聴けば、その柔和で明るい響き、美しくときに色っぽい旋律、適度な厳格さと自由さを併せ持つ様式感には、黒枠や世界苦の片鱗すらおそらく窺うことができないからである。もちろん、これはブラームス特有の茶目っ気たっぷりの(あるいは人騒がせな?)冗談で、ブラームスは気分良くこの作品を書き進めていたに違いない。というのも、20年以上もかけてようやく完成させた1つ目の交響曲が、「ベートーヴェンの第10交響曲」などと絶賛されたばかりだったのだから(一般聴衆にとっては難しすぎたようだが…)。その証拠に、この交響曲はわずか半年ほどの間に完成させてしまっている。

ところで、今夜のプログラムがすべて二長調、ということにすでにお気付きの方は多いだろう。モーツァルトの交響曲、あるいは彼の全作品の中で最も多い二長調。そんなモーツァルトを熱心に勉強した後に書かれたリヒャルトのオーボエ協奏曲も二長調。そしてこのブラームスの交響曲の二長調。ブラームスもまたやはりモーツァルトの精神を受け継ごうとしたことは想像に難くない。とりわけ、ざくざくっと歯切れのよい弦の刻みによって颯爽と、そして輝かしく流れていく最終楽章は《ハフナー》と重なっても聴こえるのではないか。

初演は1877年12月30日にウィーンの楽友教会にて、ハンス・リヒター指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏で行われた。これを聴いた批評家ハンスリクは「玄人、素人の別なく、聴く人の心に暖かい陽光を降り注いでくれる」と華やかな称賛の言葉を送っている。春爛漫の日もほど近い今宵、そんな風に包み込むような、それでいてぴりりとスパイスの効いた演奏をお届けできれば幸いである。過去にブラームスの第1番と第4番を経験してきたユーゲント・フィルハーモニーの腕の見せどころとも言えるかもしれない。

(中村 伸子)

● 活動紹介 Activity ●



依頼演奏

ユーゲント・フィルハーモニカーでは学校・老人ホームなどの福祉施設や、その他各種イベントなどでの依頼演奏を受け付けています。詳しくは当団Webサイトをご覧ください。

■ Webサイト <http://jugend-phil.com/>

● 楽団紹介 Orchestra ●

Jugend Philharmoniker ユーゲント・フィルハーモニカー

Jugend Philharmoniker (ユーゲント・フィルハーモニカー)は、財団法人「日本青年館」の音楽行事(オーケストラ・フェスタ、全国高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユング・オーケストラ・ヨーロッパ公演)に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである。



選抜オーケストラが母体となっているため、メンバーは様々な大学オケ出身のプレイヤーが揃っている。現在、団員約80名を越えるオケにまで成長し、定期演奏会を中心とした活動の他に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、その他、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。

音楽的に人間的に成熟した団体作りに励みながら「アマチュア・オケだからできること(≠プロオケには出来ないこと)」を追求することを理念としている。

Jugend Philharmoniker
The 5th Regular Concert
2011.3.19 (Sat.)
at Meguro Persimmon Hall

ユーゲント・フィルハーモニカー
第6回定期演奏会のお知らせ

2012年3月24日(土)
於 文京シビックホール 大ホール
曲目未定

- 後日ご案内をお送りしますので、アンケート用紙にご連絡先をご記入下さい。
- お問い合わせ <http://jugend-phil.com/> (当団Webサイト)